

---

# 図書館司書の憂鬱(ゆううつ)

一宮咲

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

図書館司書の憂鬱ゆううつ

### 【Nコード】

N6701K

### 【作者名】

一宮咲

### 【あらすじ】

図書館司書のアリスンは悩んでいた。職場の同僚は、気のいい人達で恵まれている。仕事も自分に向いている。でも、この図書館は不思議な事が起こっていて

ほんの少しサスペンス風。アメリカン風味を目指しましたが、微妙。  
(改)は語句修正です。

第一話 アリスン＝ボネットの悩み (挿絵) (前書き)

注意：本編は制作中のため、変更する部分があるかもしれません。  
すみません。

第一話 アリスン＝ボネットの悩み (挿絵)

> i 5 7 6 3 | 9 1 5 <

私の名前は、アリスン＝ボネット。

コレルという町の図書館司書をしている。二十七歳独身。

茶色の髪は豊かできれいって自分でも自信が持てるところだけど、仕事の時は編んで、後ろに円形にまとめピンで止めている。顔は、まあ、整っている方だと思いたい。難点は、うすらと残るそばかすだ。ファンデーションでごまかせば、消えてしまっけど。

同僚のダニエルは「そんなひつつめ髪にしなくても」「ってよく言う。

白いブラウスに、黒いひざ丈のスカートをはいていて、お堅いイメージにしている。唯一のおしゃれといえば、胸元に光っているオリーブ色のペリドット、細い金の鎖を通したネックレス。

これは私のお守り。誕生石だから守ってくれるはず。そう、守って くれる。

実は、私には悩みがある。

誰にも言えない、仕事場での悩みだ。

図書館の仲間みな気のいい人たちで、自分でも恵まれてるって思う。

そう、人間関係の悩みじゃないの。

この事を考えると、いっつも泣きたくなる。

本当に真剣に、この仕事を辞めようかと、今でも考えているのだげ。

この町は片田舎で、これ以上自分にぴったりの仕事を見付けるのは至難の業と言ってもいい。仕事の口自体が少ないのだから。

だから、踏み切れないでいる。

「アリスン、返却ボックスがいっぱいになっているわ、悪いけど戻ってきてくれない？ ちよつと今、手をはなせないのよ」

同僚のバネツサが、困ったように言った。バネツサは穏やかな中年女性で、普通なら厳しく言ってもいいところを、相手を傷つけないように言うような、優しい人だ。

「ご、ごめんなさい。私ったらばけつとしてて。今すぐ行ってくるわ」

焦って立ちあがったために、ガシャガシャと事務用椅子が音をたて、座面がくるりと回った。

「そんなに急がなくてもいいのよ」

バネツサがおかしそうな顔をして、私を見つめた。

「ええ、そうよね。と……とにかく、行ってくるわっ」

私は苦笑いを浮かべて、返却ボックス行き、本をスチールブックトラックに詰め込んだ。

この図書館は十年前に改築されたので、現代的で新しい。入り口の正面奥には、三階までをぶち抜いた広い吹き抜けと、天井までの大きなガラス窓があつて、解放感がある造りとなっていた。今日は晴れているので、日がさんと降り注いでいる。

返却された本をナンバリングにそつて本棚に戻していく。

そうやって作業していたら、雑誌コーナーのソファで話している声が聞くともなく耳に入つて来た。

初老の女性が二人、ぼそぼそと話している。

「……それでね、ミランダはさうとう参つてて、家から一步も出ないらしいのよ」

「それは、そうよね。あんな事があつたんだもの。一人娘のキャシィが居なくなつて、半年経つかしら。もうそんなに経つのね。当時

から今まで警察はまったく手がかりを見つけられないのでしょうか？ミランダも立つ瀬がないわ。本当にお気の毒よ」

「本当にねえ。旦那のボブもミランダを元気づけようとしているらしいけど、本人だって元気がないのだから、ね。買物も洗濯も、彼がやっているんですって。それで近所の人たちが手伝っているらしいけど。こういつちゃんだけど、これだけ探して居ないってことは……もう……」

彼女達の話聞いた途端、指先が震えだして、棚に入れようとしていた本をバサリと落としてしまった。

あわてて、本を拾う。

彼女達の話していた女性、キャサリン・バークレーを私は知っている。

地元のニュースで彼女の失踪は大々的に取り上げていたし、なによりも彼女に私は会った事があるのだ。この図書館で。

彼女はよく週末に図書館を利用していた。確かニュースによると、私より一歳ぐらい年下だったはずだ。

黒い巻毛がゴージャスな、さばさばしたタイプの女性。

それが半年前のある土曜日の午後、忽然と姿を消した。大人の失踪なんてよくある事とかたづけられる事もできるが、彼女はその日、友達と大好きな演劇を見に行く予定だった。正午に友達と連絡を取って、家を出ている。返却の本を返しに図書館に寄った姿が、彼女の姿が確認された最後だった。

背筋に寒気が走り、ぶるぶると震える。私は頭を軽く振ると、そそくさとその場を立ち去った。

ガラガラとブックトラックを押して、ほとんどの本を棚におさめた。

最後の一冊のナンバーを見て、「ひっ」と思わず声が出る。どうしよう、どうしよう。

体といわず、心まで凍りそうになった私に、背後から声がかけら

れた。

「こら、なにをぼさつとしているのかな。まだまだ、やることは山積みなんだけどねー、アリスン？」

軽い調子の声。振り返らなくてもわかる。ダニエルだ！ガバリと振り返った私は、まるで、救いの主にすぎる子羊のようだったに違いない。

ダニエルは目を一回またたくと、察しよく言った。

「また？」

「そう、また。お願い、ダニエル！ お昼おごるから、ね」

「うーん、お安いご用だけど。どうして駄目なのかな、あそのコーナー。前は平気だったのにさ。まあ、いいさ。ただし、お昼じゃなくて、今夜夕食でもどう？ おごりじゃなくていいからさ」

「ええ、いいわ。今夜は空いているもの。本当、ごめんなさい、手をわずらわせて」

いいよつと言うつ代わりに、彼は本を受け取ると軽く片手を振った。

そう　これが、辞めたい理由。

あるコーナーに私は近づけないのだ。

その理由、あなた、聞きたい？

聞いても、頭がイカレタ女とか言わないでほしい。

私だって、たまに自分がおかしいんじゃないかって、疑うことがあるから、あなたがそう思っても無理はないわね。

そもそもの始まりは、四年前の事だった。

第一話 アリスン＝ボネットの悩み (挿絵) (後書き)

見切り出発してしまいました。

内容は針小棒大なのですが、読んでもらえれば幸いです。

## 第二話 始まり 四年前

その日、私はおばあさんに本の場所を聞かれて棚まで、案内した後だった。

場所は図書館の左奥の奥、開架図書かいかとしよの近く。

案内したおばあさんに丁寧ていねいに礼を言われて、私は次の仕事に戻るうとしたときだった。

若い女性が棚の影から出てきて、迷うように首をめぐらせていた。手には検索で印刷したらしい紙、ああ、本を見つけれず迷っているんだと、私はピンときた。

多分、十六歳くらいだろうか。淡い色の金髪は長くって、肌は女性の私でも、うらやましくなるくらい白くてきめ細かい。桃色の唇と頬。肩にトートバックをさげ、白いシンプルでかわいいワンピースを着ていた。

まるで、物語に出てくるお姫様のイメージにピッタリだった。

「なにかお探しですか？」

私は彼女に話しかけた。彼女はちょっとはにかむようにしてから、「ええ、『トウルゲート』という本を探しているんです。なかなか見つからなくて」

と言い、印刷した用紙を私に渡して来た。

「ああ、これならこちらですわ。ご案内します」

私は迷うことなく、目的の棚まで彼女を誘導した。そして、一冊の本を取り出した。

赤さびみたいな色の装丁、年月で黄ばんだ紙、かなり年代物の本だ。

「あら、この本『禁帯出』ですね。この本は残念ながら、貸し出しができません。この図書館内での利用には問題ないですが」

「そうですか。かまいません。閲覧えつらんコーナーで利用しますから。案内して下さって、ありがとうございます。助かりました」

彼女は、本を受け取ると胸に抱き、かわいらしい笑顔を私に向けてくれた。

「いいえ、どういたしまして」

つられて、私にもこりとほほ笑んだ。そして、元来た道を戻り始めた。

さつき居た場所にたどり着いたら、床に白いハンカチが落ちていた。

ピンクのレースがついている、乙女なデザイン。もしかして、彼女の物かしら。もしかしなくても、それっぽい。そう思った私は、すぐにハンカチを持って、彼女がいる棚と棚の間の通路に向かい、ひよいつとのぞき込み言った。

「あの、このハンカチ、あなたのじゃないかしら？」

私の言葉は棚の間の床に、無機質な音をたて転がった。

居ない 二三分しか経っていないのに。

読みたくて、急いで閲覧コーナーに行ったのかしら？それとも他の本を探しに行ったとか？

念のため、閲覧コーナーに行ってみたが、彼女は見付からなかった。

まあ、いいわ。次の仕事が詰まっているし、ハンカチ失くしたって気が付いたら取りに来るでしょ。

その時、私は、気にも留めなかった。

愕然としたのは、その次の次の日。テレビで彼女の行方不明を取り上げた報道を見た時だ。

図書館にも警察が来た。

イカツイおっさんの刑事に、私は思い切って、一連の出来事を話した。

だが、鼻であしらわれただけだった。

私もそれ以上、しつこくできない。なにが起こったのか、私にも全然わからないのだから。

「二・三分で人が忽然と消えるんです！」なんて力説したら、頭イカれてるって刑事でなくなっただって思うだろう。お前は奇術師かってでも、私は何かひっかかっていた。なんだか、わからないけど薄気味悪い。

本棚には、『トウルゲート』の本がちゃんと収まっていた。彼女が閲覧したはずの、本。

もしかして彼女は、この本を読んで、棚に戻し、図書館を出た後に、何かトラブルに巻き込まれたのかしら。そう考えた方が妥当だ。本棚から『トウルゲート』を取り出し、ぱらぱらめくる。古い本だが内容はファンタジーだ。伝承や伝説を元に書かれたらしい異世界もの。別に何の変哲もない。

ふうとため息をつくとき、本を棚に戻して立ち去った。

それから、彼女、クラリツサ・アシュバートの消息は誰にもつかめなかった。

そして、今から三年前、クラリツサの事件から一年後の事だ。

### 第三話 音 三年前

返却本を棚に戻す作業をしている私に、誰かが声をかけた。

「すまんが、この本はどこにあるか、案内してもらえんかね？」

振り向くと、恰幅かつぶくのいいおじさんが立っていた。おなか周りがかつても目立つ、五十歳前後のおじさん。髪とあご髭ひげに白いものが混じっている。

おじさんは、端末装置で印刷した紙を私に押し付けた。

「……これ、ですか？」

小さな紙つきれには、『トウルゲート』とはつきり印刷されていた。

ファンタジーとこのおじさん、とてもミスマッチな気がしたが、人は見かけによらない。

「あの、ファンタジーお好きなんですか？」

唐突に質問した私に、おじさんは少し怪訝けげんな顔をしたが、答えてくれた。

「別に、いつもは読んだりしないんだが、たまにはこうゆうのもいかなと思つて。なんでそんなこと、お前さんが聞く？」

「いえ、えつと……この本は貸し出しができません。持ち出し禁止の図書です。図書館内の閲覧えつらんしかできません。えつと、

……よろしければ、似た分類の、貸し出し可能な本をご紹介しますし……ようか？ この本は長編小説で、読むのに時間がかかりますし……」

私は、訳のわからない嫌な予感がしていた。胸が変にざわつき、ドキドキとした。

自分でも苦しい言い訳をしていると思つたが、あの本におじさんを関わらせたくない思いで一杯だった。

第六感という、やつだと思つた。

おじさんは、むつとした。

「俺には長い文章の本が読めないっていうのかい？ 俺は、この本

が読みてえんだ。他の本じゃねえ。失礼な司書だな！ 他のやつに聞くから、もうけっこうだ！」

と声を荒げて行ってしまった。

馬鹿な事をした。上司にクレームなんて言われたら、最悪じゃない。私は額に手を当てて、おじさんの姿を目で追った。

近くの司書に本当に聞いていた。あの司書は、シンシアだ。場所を聞いたおじさんは、例の開架図書コーナーに向かって、ずんずんと進んで行く。

その時　　ブーンというような低音の耳鳴りがした。

耳鳴りとも違う、何て表現していいのかわからないけど、音が聞こえたのだ。

おじさんの向かう、あの開架図書かいがとしょの方向から。

嫌な予感が胸にぶわりと膨れ上がる。

私は、急いでおじさんを追いかける。

急ぎ足で、焦っていたので、もうほとんど小走りで！

まずい、まずい、まずい、そんな言葉の羅列りれつが頭をまわっている。なにが、まずいってどういうの、アリスン？ 冷静な自分が嘲笑ちやうしやうするよ  
うに言うのも聞かず、私は急いだ。

もうすぐ、おじさんに追いつく！ そんな瞬間。

横から勢いよく、こどもが飛び出してきた。

ドスンと、ぶつかる。

こどもと私、図体がでかいのは私だ。当然、こどもの体は弾き倒された。

はっとして、私は屈み込むと、こどもを助け起こす。

「大丈夫だった！？ ごめんなさいね、痛いところない？」

あわあわする私に、五歳児ぐらいの、きかんきそうな男の子は、怒ったような顔をして口をへの字に結んでいる。

ああ、もしかして、泣くかしら？ そう困惑する私に、男の子はきつと睨みつけ、

「ブスっ！」

と一言叫ぶと、走ってその場を逃げ出した。

いつもなら、「なんですってええ！ このクソガキ」と心の中で怒りながら、図書館で走るなど注意すべく追いかけるのだが、今はそれどころではなかった。

立ち上がり、おじさんの姿を探す。

例の本棚の通路に曲がるおじさんの姿が飛び込んでくる。

ああ、間に合いそうにない、おじさんと私の距離はかなりある。それでも、私は追いかけた。

角を曲がり、ぱつと通路に飛び込む。

棚と棚に挟まれた通路に、おじさんの姿はなかった。

「そんな……馬鹿な。つい、さっきなのよ……」  
かすれた声で、私は一人つぶやいた。

向こう側の、棚の端まで歩いて行って、横方向の通路に頭を出して、左右に視線を走らせたが、居ない。

どうゆうこと？

その時、気が付いた。耳鳴りのような低い音が消えていることに通路を恐る恐る戻って、本棚を確認する。

そこには、赤さびた地に銀色の飾り文字で『トウルゲート』と書かれた背表紙があった。まるで、何事もなかったように。

顔から血の気が引いて行く。私は、じりじりと後ずさり、転ぶように走ってその場から逃げだした。図書館は走ってはいけない事も忘れて。

おじさんの失踪は、あまり報道されなかった。地元新聞の後ろの方に、ほんの小さくのったくらいだった。おじさんは、車を整備する小さな店を経営していたらしい。経営は上手くいっていなくて、借金も少くない額あったみたい。だから、噂では、夜逃げしたんじゃないかと、ささやかれていた。

休日の自宅で、その噂を聞き込んで私に話してくれた母は言った。

「最近は、よくある事みたいよ、不景気だから。世知辛いわね、そう思わない？」

私は答えられなかった。いつきに顔が強張った。

「あら、どうしたの？変な顔しちゃって」

母はどこまでも、のん気だった。

おじさん、ビリー・バーンズは、家族もいなかったみたいで、その話はそのまま風に吹き飛ばされる砂のように、忘れ去られた。

誰が忘れても、私は忘れられない。

はつきりした証拠がないけれど、あの『トウルゲート』という本のために、知りうる限りでは、二人の人間が姿を消したのだ。

私は、そう思っている。

だから、ある会議で、あの本を地下の書庫に入れることを提案した。

あまり閲覧する利用者もないのだからと、私は主張した。

だが、上司のベイン氏に見事に却下された。

その後、何回か会議で提案したけど、聞き入れてもらえなかった。強固に食い下がる私を、ベイン氏は不思議がり、

「なぜそんなにこだわる？ 不可解だな。ボネットくん、なにか理由があるのかね？」

と言った。理由を聞かれても、はつきり言えるわけない。

私は黙るしかなかった。

ビリー・バーンズの事件から二年半は、何事もなく過ぎていった。ただ、私はあの開架図書コーナーの近くの返却本を返しに行くのは恐怖だった。

それでも、この期間は怖くても、あのコーナーの近くに行っていたのだ。

まったく、近づけなくなったのは……

## 第四話 鍵 半年前

今から半年前、キャサリン・バークレーが図書館にやって来た。カウンター仕事についていた私は、彼女から本を受け取り、本の裏のバーコードに赤いレーザーを通した。

「はい、返却されました」

彼女は返却が済むと、検索コーナーに行つて、パソコンを操作していたみたいだ。

はつきりとは、わからない。私は彼女に注意を払っていなかったから。

利用者の返却手続きをしていると、ビーンという音が聞こえてきた。

かなり、はつきりと。

私は顔を上げて、開架図書コーナーの方角を見た。

すると、女性が一人、その方向に向かって歩いている。

音は波長のように、ゆらいで、まるで彼女を導いているようだ。

「バネッサ、ちょっと替わってくれない！すぐに戻るから！」

私の後ろでパソコンの事務処理しているバネッサに早口で言つて、カウンターを飛び出した。

「えっ?! アリスン?」

バネッサのうるたえた声が聞こえたが、私は一目散に女性を追いかけた。

「あのっ!」

「あの! すみませんっ!」

勢いこんで呼びかけられた彼女は、ちょっとビツクリした顔をしていた。背中まで伸びた漆黒の巻毛が、振り返った動作に合わせてふわりとゆれる。胸の開いた黒いドレスと洒落たカーディガン、赤いルージュと同系色のヒールの高いパンプスを身に付けた美人。

「私？ な……何かご用？」

急いで早足で来た私は、肩で息をしていたから、「その……」と続けただけだった。

実際、追いかけて来たものの、どうやって彼女をあの本から遠ざけるか、彼女をどう説得するかまったく考えていなかった。頭真っ白という状態。

「あ、さっき返却した本に、何か問題でもあったとか？ もし、あったとしても、私じゃないわ。私は借りた本を手荒に扱ったりしないから。きつと、前回借りた人よ」

「いえ、そうじゃなくて……」

私はそう言ってから、彼女の言葉から説得のアイデアを思いついた。

「じゃあ、なんなのかしら？ 私、急いでるのよ」

「返却された本に、問題はございません。誤解させてしまい、申し訳ございません。ですが、今あなたが借りようとしているのは、その、『トゥールゲート』ではありませんか？」

「え、そうだけど。なんで、わかったの？」

「検索端末は、カウンターのコンピューターに連動しているのです。検索がかかっていると小さなウインドが出て、リアルタイムに表示されるシステムになっています」

大ウソだ。ものは言いよう！

「ああ！ なるほどねー」

彼女は明るくからつと笑った。

「それで、『トゥールゲート』なのですが、<sup>そんしょう</sup>損傷が激しいため修理の必要がございます。これから、回収に行くところを、あなたが検索されたので、急いで追いかけた、という次第です」

「じゃあ読めないってこと」

「そういう事になります」

と話をしめくくって、私はこれから自分が行う事を思った。

「残念だけど、しょうがないわね。まあ、あなた大丈夫？ 顔が真っ

青

確かに、ちよつとふらつと貧血も起こしかけた私。

「大丈夫です。では、失礼します」

私は、ゆっくり開架図書コーナーのあの棚の方へ向かって歩いて行った。

棚の間の通路は、なんだか暗い雰囲気。気のせいだろうか。

でも、先ほどまで響いていた音はしなかった。

ごくりと喉を鳴らして、そろそろと目的の場所に行く。

『トウルゲート』があつた。

彼女に公言した手前、本棚にこの本があるのはまずい。それに、このまま放置したら、彼女が来るかもしれない。なんせ、本に呼ばれているようなのだから。

本を取るために上げた手が小刻みに震えている。

気分は爆弾処理班だ。

本を棚から取り出すと、急いでカウンターに向かった。

カウンターに戻ると、バネツサに、

「ごめんなさい。すぐに替わるわ」

と言つて、カウンター奥の施錠型の戸棚の一つに『トウルゲート』を放り込んだ。壁にかけてあつた鍵を取つて、戸棚にガチャリと鍵をかける。

その鍵を、スカートの小さなポケットに入れた。本当はこんな事をしてはいけないのだけど。

バネツサの横に戻つたところで、上司のベイン氏が来て声をかけた。

「アリスン、手が空いているならメンテナンス室に行って、館長用資料室のスペア・カードキーをとつて来てくれないか。館長がどうもカードを紛失したらしい。緊急で館長の部屋まで届けてくれ、頼んだよ」

「はい、わかりました」

「行つてらっしゃい。ここはまかせて。私がしていた事務処理の方は気にしないでいいのよ。ほとんど終わっているから」

バネツサはにこやかに言った。勝手に持ち場を離れて仕事を押し付けた私なのに、バネツサはやさしい。

「本当、感謝してるわ」

そう言つて図書館の入り口に向かい、外へ出た。

メンテナンス室は図書館の併設された二階建ての施設にあるため、一旦外に出なければならぬのだ。私は必要書類に記入しスペア・カードキーを受け取り、図書館に戻つて、三階にある館長室に届けた。

カウンターに戻つて来ると、「おかえりなさい」とバネツサ。

ちようど、人が途切れたみたいで、カウンターには人が並んでなかった。

「ただいま。思ったより時間がかかったわ。メンテナンス室つて、どうして図書館内に造らなかつたのかしら。それに館長にも参つたわ。行つたら、デスクの引き出しの奥にカードキーが入つてたなんて言つのだもの」

「それは災難だったわね」バネツサは苦笑いを浮かべた。

「そうなのよ。今度こそカウンター替わるわ。ちよつと待つてて」と言つて、物をとりに奥のコーナーに行くと、鍵をかけたはずの戸棚が半開きになつているのが、目に飛び込んだ。えっ、どうゆうこと？

恐慌状態になりながら、戸棚にかけよる。確かに入れたはずの本が影も形もなかった。後ろを振り返つて、バネツサに焦つた声で聞いた。

「バネツサ、バネツサ、ここに入れてあつた本、どこいったか、知らない？」

ちようどその時、空のスチールブックトラックを押してカウンターに戻つて来たシンシアが、口を開いた。

「あ、それって『トウルゲート』じゃないですか？ 私、大分前

に棚に戻しておきましたよ。その床に転がって落ちていたから。もしかして、何か修復でもする予定だったんですか？」

床に、落ちていた。なぜ？ ちゃんと鍵をかけたのを私は確認したのよ。

まるでスローモーションでしか動けない人形のように、そろそろと黒いスカートのポケットに手を伸ばした。鍵は、あった。あったのだ。あの棚の施錠せじょうは勝手に開いたとでもゆうのか。

額に冷や汗が浮かんでくる。顔色が一気に悪くなった私に、シンシアは心配そうに、

「どうしたんです？ 私何か、悪い事しちゃいました？ もし、本が必要なら今すぐ取って来ますよ？」と聞いてきた。

「いいえ、……いいえ、大丈夫。必要ないわ」

そう、もう必要ない。もし、勝手に本が自分の場所に返ったとしたら、もう間に合っていないのだから。多分、黒髪の女性は、ここにはいない。

とてもじゃないが、あの棚に行って状況を確認する勇氣は湧いてこなかった。

## 第五話 異常

キャサリン「バークレーが失踪した次の日からだった。図書館に波長のようなゆらいだ音が常に聞こえるようになったのは。

音について他のスタッフに聞いてみたけれど、誰も聞こえないみたいだった。

そう、私の耳にしか聞こえない。

ゆらぐ音は、ある日は大きく響き、ある日はほとんど聞こえないほど小さい、変化するみたいだった。

なぜ、音がずっと止まらないのだろうか？

もしかして、もしかすると、私を餌食に狙っているのだろうか？怖すぎて、それからというもの開架図書コーナーには近づけない。あの本にも触れることなんて、もうできない。

今はなんとか、ダニエルやバネッサに助けてもらいながら仕事を続けているけれど、こんな状態でいつまでもいけるわけない。

半年もただただでも、驚嘆ものだった。

あの本は得体がしれない。

クラリッサ「アシユバートン、ビリー「バーンズ、キャサリン「バークレー。」

最初のクラリッサは別として、後の二人は原因に目星がついていたのにもかかわらず、助けることができなかった。地下の書庫に封じ込めることも、上司が反対しているためできそうにないし、できたととしても、鍵の事件を考えると完全な安心は手に入りそうもなかった。

神経がすり減ることに耐えられなくなった私は、諸々の事情は伏せて、母に仕事を辞めようかと考えていることを軽く話したところ、「なぜなの？ なにかがあったの？ 仕事でトラブルでもあったの？ ああ、アリスン、言いたくはないけれど、今の仕事みたいに堅

実であなた向きの仕事をこの町で探すのは大変なのよ。お隣さんのローズには、娘さんの仕事は景気に左右されないからいいですねって、いつもうらやましがらわれているっていつの日に。訳を話してみなさい、ママが力になれることなら、なんだったってするから」

と言つて、なぜ？なぜ？を繰り返した。

昔から知つてはいたが、母は世間体を気にするタイプだった。

理由を打ち明けることも考えたが、信じてもらえそうにないし、変になったと思われ遠くの病院　近所の目があるため遠くになるだろう　に連れて行かれそうだったので、曖昧にごまかすしかなかった。

これで、わかったでしょう？私が開架図書のコナーに近づけない理由。

そして、仕事を辞めたい理由。

言つときますけど、私は妄想も幻聴も虚言癖もないわ。私が、そう思っているだけかしら……確信が持てなくなっているわ、何事にも。

最近は何も微かにしか聞こえない、半年前から徐々に音は小さくなつてきている。でも、まだ私の耳には聞こえるのよ。事が事だけに、誰にも相談できずに一人で抱えて。本当、泣きたいわ。

## 第六話 行動 - 現在 I

カウンターに戻って来た私は、大きくため息をついた。  
パソコンを操作していたバネツサが、こちらを振り返る。

「大きなため息ね。そんな疲れているあなたに朗報ろうほう、休憩時間よ。  
ダニエルもすぐお昼休憩に入ると思うけど、先に入っちゃって」

私はうなずいて奥に行き、財布を小型ロッカーから取り出すと、  
カウンターから出ようとした。

ビーン、ひと際大きな音が図書館内に響き渡った。

はっとして、急いで周囲を見回した。

カウンターの反対側の検索コーナーから一人の男の子が、図書館  
奥へ向かって歩き出しているのが目に入った。

あわててその背中を追いかけ声をかける。

「ねえ、そのあなた、ちょっといいかしら？」

男の子が振り返る。教会の天使像が動き出したと言っても信じて  
しまいそうな端正な顔立ちの少年。サラサラしたプラチナブロンド  
の前髪の下、薄青の瞳が不思議そうに私を見つめた。

「僕ですか？」

「……ええ、あなたよ」

彼の美貌ひびようにはっと息をつめてしまったが、何とか言葉を口にした  
る。

年齢は十六〜十七歳くらいだろうか。女性の平均身長といえるア  
リスンよりも頭一つ上くらいなので、そんなに背が高くはないが、  
手足はすんなり伸び、成長期の若木のような清々しい印象を与える。  
白いシャツの上にグレーのセーター、チャコールグレーのズボン  
という出立ちで、片手には四角いバック、もう一方に印刷された紙  
を持っていた。

「あの、えっと、もし、今あなたが借りようとしている本を、私が  
当てる事ができたら、ちょっと付き合ってくれないかしら。話があ

るの。もちろんタダとはいわないわ。コーヒーくらいはおごってあげる」

「は？ えっと、僕は……」

男の子が断りのセリフを言う予感を前に、私は勢い込んでまくしたてた。

「こんなことをいきなり言うなんて、危ない女だと勘違いしても仕方がないけれど、私この司書をしている者だから、身元は確かよだから、私の言う事を聞いてちょうだい！」

言っていることが支離滅裂だなど思った。男の子は目を瞬いて、戸惑っているようだ。そりゃ、そうだろう。私だって逆の立場なら戸惑う。

「あなたが借りようとしているのは、『トウルゲート』……でしよっ？」

男の子がちよつと驚いた顔をして「ええ、そうです」と言い、手に持っていた紙に視線を落とした。紙を私に手渡しながら、「よくわかりましたね、どうしてですか？」と尋ねて来た。

「説明するわ。でもここでは駄目。通りの向こうのカフェでどうかしら？」

内心、ドキドキしながら、返事を待つ。自分でも思い切った行動をしていると思う。

「いいですよ。その代り、ちゃんとコーヒーおごって下さいね」

彼はさわやかに、にっこり笑った。彼の笑顔を見て、思わず入っていた肩の力が少しぬけた。

カフェは新しく、ガラス張りの壁から図書館の全景が見渡せる。白いテーブルに彼と向かい合わせに座ると妙に落ち着かなかった。テーブルには、私の昼食のサンドイッチとカフェラテ、彼のカップチーノが乗っていた。

自分だけ昼食を食べるのは誘った立場上悪いと思って、私は昼食

をおごると言ったのだが、彼は丁寧に辞退した。

さて、どう切り出したらいいかしら。

「まず、自己紹介するわ。私は司書をしているアリスン・ボネット  
よ」

「僕は、エリック・クラフです」

「クラフさん、『トウルゲート』はどうしても読まなければなら  
ないのかしら？」

「エリックでいいですよ。クラフさんなんて呼ばれると、変な感じ  
だから。それはどういう意味です？ 読んではいけないって事です  
か？」

「ええ、エリック。あなたに読んで欲しくはないわ。理由は話せば、  
少し長くなるけれど。それに、信じられない内容だとも思うの。で  
も、私はこの話に確信を持っているわ」

私は、正直に今までの話を彼にした。

話し終わると、エリックは鳩が豆鉄砲を食らったような顔をして  
いた。そして、すぐにうつむくと、肩を震わせて笑いだした。

「ボネットさんって、面白いですね！ 真剣な顔をしながら、ジヨ  
ークを言うなんて！ 司書なんてお堅い人ばかりと思っていたけど、  
そうでもないんだ！」

「ジヨークじゃないわ！ ああ、もう、どうしたら信じてくれるの  
！？」

私はテーブルに肘をつき、手で頭を抱えた。

「ジヨークじゃ、ないんですか……ボネットさん、大丈夫ですか？  
急にエリックは心配そうな顔をした。

「……アリスンでいいわ、エリック。私の話を信じないとあなたは  
後悔するわ。後悔した時では遅いのよ。私の話を真剣に聞いて。私  
だって毎日怖くて、このネックレスのお守りを着けていることで、  
なんとか心の安定を保っているのよ」

私は、胸の金鎖にペリドットをギョツと握ってみせた。

「本当はこんな事……あなたに真実を告げる事さえ、本当は怖いわ。

あの本に呪われそうで」

ぶるつと、身震いをする。私の様子に真実味があったのだろう、エリックの表情は少し真剣になったようだった。

「『トウルゲート』は、高校の先生が推賞すいしょうした本なんです。来月未までの読書感想文の課題があつて、それで僕は読んでみようと思つて今日来たわけですよ」

思わず、その教師首をしめてやりたいと私は考えてしまった。

「それなら、どの道無理ね。『トウルゲート』は貸し出し禁止なのよ。家に持ち帰ることはできないわ。感想文向きの本ではないということね。私が、代わりの似た本を見つくるってあげるから、絶対に『トウルゲート』には近づかないで。これはお願いじゃないわ、忠告よ」

私は真剣にエリックの空色の瞳を見つめて言った。

エリックはしばらく、何も言わず考えていたが、

「アリスンさんが、真剣にそれ程言うのだから、本に近づかないほうが賢明そうだ。僕もちよつと怖くなつたしね。その代り、ちゃんと良い本を紹介して下さいね」

と彼はにっこりと笑った。

図書館に戻ると、エリックにはカウンター前にしてもらい、私はお勧めの本を何冊か探してきて彼に渡した。エリックがその中から二冊本を借り、図書館入り口を出るところまで見送った。図書館内にはまだ音がして、そこまでしないと安心できなかったから。

なぜかわからないけれど、同僚のダニエルはエリックの事を知りたがった。誰だとしつこく聞くので、知り合いのお子さんだから、色々とお世話していたと、ウソの言い訳をするはめになった。夜にダニエルと町にあるイタリアンのお店で夕食をとったけど、半分上の空だったので、彼には悪い事をした。エリックを救えた事は、私にとつて思つた以上にうれしい事だったみたい。

なのに

彼は消えた。

## 第七話 夕刻

赤い夕陽が、壁一面のガラス窓から見える。

巨大な夕陽は、図書館内を赤い光で染め上げ、また暗い影も生み出している。

デスクに座り、最後の修復が必要な分厚い本を手にとりながら、アリスンはどこかぼんやりとしていた。

エリックの失踪しっそうを私が知ったのは、あの日の次の朝だった。

キャサリンの事件から間がなかったため、町も報道も大騒ぎになった。

“ またも図書館の利用者の失踪しっそう”、 “ 連続誘拐事件か ” とニュースで取り上げられ、図書館に報道陣と警察が押し掛けて来て大変だった。

けれど、はっきりとした物証や目撃証言があるわけではなかったので、警察は数日のうちに引き上げた。警察に比べて報道陣は長く図書館外で居座っていたが、四日前に政界の大物政治家スキャンダルが発覚してから日ごとに数が減り、今正面玄関に立っているのは一人。

今、図書館は数日前の喧騒けんそうがウソのように、閑散けんさんとしている。

利用者がほとんどいない。

連続誘拐、悪くすると殺人犯の可能性がある人物がうるついているかもしれない図書館。

誰も来たがる訳がない。

テレビでエリックのニュースを聞いた瞬間、私は仕事を辞めると決めた。

もう上司のベイン氏にも話してある。すぐに辞めるわけにはいか

なかったから、今月末になるだろうけど。上司は退職することを伝えると引きとめた。が、決意が固いとみると、私に口止めを要求した。みんなが不安定な状態で私が辞める話が出れば職場の状況を悪化させるというのだ。頭の固い偏屈へんくつなベイン氏の考えそうなことだった。

ずっとあれから私の頭は疑問と混乱で占められている。仕事場でも、家出も。

エリックはどうして消えたの？

エリックは、やっぱり私の話を信じられず、あの本を触ったのかしら？

それとも、あの本には強力な力があって、阻はばむ事などできないのかしら？

怖い考えに行きつき、いつも背筋がぞつとして小さく身震いする。そして不吉な考えを頭の隅に押しやる。

今できることは、一日一日を無事に過ごすことだけ。

幸い、“あの音”はエリックと会った日以来聞こえない。初めから無かったように、ぱったりと止んでいた。

図書館がさびれた状態なので、スタッフみんな元気がなかった。利用者もいないので、バネッサと私、ダニエルともう一人の男性スタッフのサムを残して、地下書庫の整理にみんな出払っている。

ため息をついて、物思いから修復作業に戻ると、ほどなく作業を完了させた。

修理を終えた本をまとめて腕に持ち、席を立った。

「ちょっとこれを棚に戻してくるわ」

バネッサが驚いた様に目を見開いてこちらを見た。

「えっ、一人で行くつもり？　ここであつたなんて私は思いたくないけれど、物騒ぶつそつな事件があつた後だし、サムかダニエルと一緒に行動した方がいいわ。あら？　サム？　後ろに居たはずなのにどこに行つたのかしら？」

アリスンも振り返ると、さっきまでパソコンの前で作業していたサムの姿が無いことに気が付いた。彼はプロレスラー並みのがたいがいい男で、自らカウンター業務の護衛的役割を買って出ていた。「まったく、あの人たら一声もかけないで消えるなんて。もうすぐダニエルが書棚の整理から戻って来るはずだから、もう少ししまつたら？ もしくは、あと少しで閉館だし地下のみんなが戻ってからでもいいんじゃないかしら。」

「うん、そうね。でも、数もそうないし、ぱぱっと棚にかえしてくるわ。この階を警備の人が巡回中だと思っし。ちよっと前に姿を見たのよ。何かあつたら、大声出すか、配られた防犯ブザーを鳴らすわ。」

腰の細いベルトに通したストラップ付きブザーを示してみせる。

「でもね……アリスン。そうだ、私が付いて行くわ。人もほとんど居ないから、短時間なら大丈夫よ」

「確かに人がいないけれど、カウンターを無人にするわけにはいかないじゃない。大丈夫よ、バネツサ。すぐ戻ってくるわ」

まだ不安げなバネツサの肩をぽんぽんと叩いて、素早くカウンターを出て歩き出した。

彼女の言う物騒な事件の原因は、人じゃないのだから、こんな防犯ブザーなど役に立つわけないわと冷めた頭で、腰に付けた赤いブザーをちらりと見た。

## 第七話 夕刻（後書き）

見切り掲載。続きは『夕刻』に付け足す予定。長かった場合は次の話に分けるかも。まだ続きます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6701k/>

---

図書館司書の憂鬱(ゆううつ)

2010年10月8日14時32分発行